

## 第5回 AI 社会実装アーキテクチャー検討会 議事概要

2021年3月5日 10:00-12:00

### ガイドラインに関する議論

- マルチステークホルダーの観点を意識することは重要である。産業向けということ意識しながら、消費者側として納得のいくものにしていくべき。
  - 消費者側の典型的な不安に配慮し、企業側としても必要以上の批判を受けることがないように考慮し、対応をしていること。同時に、産業育成を推進するのであるというバランスが大事である。
  - 今後、コーポレート・ガバナンスのあり方が大きく変わっていくという議論がある。その観点からの連携をすることを考えていきたい。
  
- ガイドラインが示すものと事例が示すものを、どのように活用したらよいものか、構造をわかりやすく示すべきではないか。
  - どこがガイドラインでどこが事例なのか、読んでいてわかりにくい。AI を使おうという会社が共通に考えることがあり、そのうえで対応すべきことが千差万別にある。そうした2レイヤにわかれる。階層として考えていくのではないか。前段でそれを明示する必要があるのではないか。
  - ガイドラインは様々な立場の方が利用できるよう作成されていると思う。実際には、開発する側と利用する側で違いがあるかと思う。ガイドラインに取り入れる事例としては、色々な立場の方の目線で整理するのが良いというイメージがある。
  
- ガイドラインとして、データの論点を含めるのは良い。AI データ活用コンソーシアムの検討を参考にしつつ、取りまとめ方を考えていくべき。
  - OECD のフレームワークとの関係についてまだわからない点もある。
  - AI データ活用コンソーシアムでの調査研究と OECD の議論は違う目線にあるようにも思う。
  - データ由来のリスクとそうでないものをどう切り分けるかは論点である。設計・開発・運用というサイクルのなかで、どのプレーヤーがどこに関与するかを示せないかと考えている。
  - 企業の人と話をすると、情報システムや IT を使って製品開発をする際のガバナンスはかなり認識や理解が深い。一方で AI・機械学習というと、社内・外部でのデータ統制が必要になり、現状の取り組みは不十分である。AI ガバナンス、情報システム、セキュリティガバナンスに加えて、データのガバナンスがある。いつ、だれが、どのようにデータを取得したのかを把握できておらず、属人的に管理されている企業がほとんどである。AI 活動で品質評価を考えると、社内ですえデータトレーサビリティが管理されていないうえ、外部では更に限られるという点で、話題に挙がることが多い。
  
- その他の論点・提案等

- ガイドラインの出口として、インセンティブの設計もあるが、非拘束なデータ・プロテクション・アセスメントのようなものを合わせて公表するという考えもある。
- AI のリスクを考えるにあたり難しいのはダイナミックであること。よって、メタなレベルでガイドラインやチェックリストがあるという形が望ましいのではないか。技術革新の中で、目立つ事例が起こると問題になる。このチェックリストを満たせば良いのだと解釈されると、問題になってしまうこともある。
- ガイドラインを使う立場としては、社内で開発者、運用者、利用者は、違った観点でリスクがある。ユーザーごとにどういう観点が重要なのか、混乱しないように示してあることが重要である。

以上